

あるまりの一生

小川未明

青空文庫

フットボールは、あまり坊ちゃんや、お嬢さんたちが、乱暴らんぼうに取り扱とあつかいなさるので、弱よわりきっていました。どうせ、踏ふんだり、蹴けつたりされるものではありません。すこしは、自分じぶんの身みになって考かんがえてみてくれないと思おもったのであります。

しかし、ボールが思おもうようなことは、子供こどもらに考かんがえられるはずがありませんでした。彼かれらは、きやつ、きやつといつて、思おもうぞんぶんによりを踏ふんだり、蹴けつたりして遊あそんでいました。まりは、石塊いしころの上うえをころげたり、土つちの上うえを走はしつたりしました。そして、体からだじゆうに無む数の傷きずができていました。

どうかして、子供こどもらの手てから、のがれたいものだと思おもいました

けれども、それは、かなわぬ望みのぞでありました。夜よるになると、
 体からだじゆうが痛いたんで、どうすることもできませんでした。まれに雨あめ
 の降ふる日ひだけは、楽らくらく々とされたものの、そのかわり、すこし雨あめ
 が晴はれると、水みずたまりの中なかへ投げ込なまれたり、また、体からだじゆうを
 泥どろよごで汚よごされてしまうのでした。雨あめの日ひが長ながくつづけば、つづくほ
 ど、その後あとでは、いつそうみんなから、手てひどく取とり扱あつかわれなけ
 ればならないので、まりにとつては、雨あめの降ふる日ひさえが、その後あと
 のことを考かんがえると、あまりうれいものではなかつたのです。

あるとき、フットボールは、みんなから、残ざんこく酷こくなめにあわさ
 れるので、ほとんどいたたまらなくなりました。そして、いつも、
 いつも、こんなひどいめにあわされるなら、革かわが破やぶれて、はやく、

やく 役にたたなくなつてしまいたいとまで思おもいました。

こんなことを思おもつていましたとき、彼かれは、力ちからまかせに蹴けと飛ばさ
れました。そして、やぶの中なかへ飛とび込んでしまいました。まりは、
しげった木こえだ枝かの蔭かげに隠かくれてしまったのです。

「まりが見みつからないよ。」

「どこへいったらう?」

子供こどもたちは、おおぜいでやぶの中なかへはいつてきて、まりを探さがし
ました。しかし、だれも、ボールがちよつとした、木こえだ枝かの蔭かげに隠かく
れていようとは、気きづかなかつたのであります。

「ここんところではない。ほかのところかもしれないよ。」

子供こどもらは、ほかの方ほうめん面めんへいつて探さがしはじめました。そして、

見つからないので、みんなはがっかりとしてしまつて、いつしか、どこへかいつてしまいました。

あとに、まりは、独り残されていました。しかし、また、子供たちがやってくるにちがいない。そして、見つかったら、いつそうさかんに投げたり、蹴られたりすることだろうと思うと、まりは、ため息をせずにはいられませんでした。

フットボールが、木枝の蔭で、小さくなつているのを、空の上で、雲が、じつと見ていました。なぜなら、雲は、まりが子供らから、いじめられるのを、かわいそうに思つていたからであります。

雲は、だれにも気づかれないように、そつと空から下へ降りて

きました。

「フットボールさん、お気の毒どくです。私わたしは、なんでもよく知しつて
います。あなたほど、やさしい正しょうじき直ちかない方かたはありません。
それなのに、毎まい日にち、ひどいめにおあいなれされています。幸さいい、
だれも、いまは気きづきませんから、この間まに、私わたしといっしょに空そら
へおいでなさい。そうすれば、もう、みんなの手てがとどかないか
ら安あん心しんです。そうなさい。」と、雲くもはいいました。フットボ
ールは、こういわれると、日ひごろから、空そらにいて、じつと下したを見み
いた白しろい雲くもでありましたから、なつかしそうに、
「ごしんせつにいつてくださって、ありがとうございます。私わたし
たいなものが、あ的美うつくしい空そらへいつて、すんでいるところがあり

ましようか？」と行って、たずねました。

雲は、にこやかに笑いました。

「それには、いい考えがあることです。はやくなさらないとだめですから……。」「と行って、雲は、まりを急ぎたてました。

フットボールは、雲の言葉に従いました。そして、雲に乗って、空へ、高く、高く、昇ってしまったのであります。

「まりさん、私は、夜になると、こういうように月を乗せて、大空を歩くのです。しかし月は、夜でなければ、やってきません。あなたは昼間は、月のかわりに、ここからじつと下界を見物していなされたがよいと思います。」と、雲はいいました。

フットボールは、白い月のように、円い顔を雲の間から出して、

した
下をながめていました。だれも、自分^{じぶん}をまりだと思^{おも}うものはあり
ませんでした。

「あすこに、昼^{ひる}のお月^{つき}さまが^で出ているよ。」といつて、子供^{こども}たちは、
仰^{あお}ぎながらいつているのを、まりは聞^きいたのであります。

フットボールが、見^みえなくなつてしまつてから、子供^{こども}たちは、
ほんとうにさびしうでした。広場^{ひろば}へ集^{あつ}まつてきても、いままで
のように、きやつ、きやつといつて、遊^{あそ}ぶこともなくなりました。
「あのフットボールは、どこへいったらうね。」と、一人^{ひとり}がいい
ますと、

「いいまりだったね。」と、ほかの一人^{ひとり}が、なくなつたまりをほ
めました。

「あんまり、ひどく蹴けつたから、いけないんだね。」と、なかには、後悔こうかいしたものもありました。

子供こどもたちのいうことを、空そらで聞きいていたまりは、かつて、自分じぶんのことなど、口くちにも出ださなかつたのに、いまはこんなに自分じぶんのことを子供こどもたちが思おもっているかと思おもうと、うれしいような、悲かなしいような氣持きもちちがしたのであります。そして、それほどまでに、自分じぶんを愛あいしてくれるなら、たとえ自分じぶんは、どんなにつらいめをみても、子供こどもたちを、喜よろこばしてやりたいというような考かんがえになりました。

まったく、まりは、いまは雲くもの上うえにいて安あん全ぜんでありましたけれど、毎まい日にち、毎まい日にち、仕し事ごともなく、運うん動どうもせず、単たん調ちように

倦あいでいました。そして、だんだん地ちの上うえが恋こいしくなりはじめたのでありました。

まりは、地ち上じょうに帰かえろうかと考かんえました。そのとき、風かぜは、彼かれにささやいたのであります。

「そんな氣きを起おこすものではない。もしおまえさんが帰かえったら、もう二度どとここにはこられないだろう。そして、いままでよりか、もつといじめられるだろう……。」と、風かぜはいつたのであります。

雲くもは、また、まりに向むかって、

「もう、あなたは苦くるしいことを忘わすれたのですか。ここに、こうしていたら、どんなに安あん心しんであるかしのれない。あの子こ供どもたちも、じきにあなたのことなどは忘わすれてしまいます。」といいました。

まりは、子供たちといっしょになつていた時分が、やはり恋しかったのです。そして、独りぼっちとなり、やがて、みんなから忘れられてしまふと考えると、もうじつとしているわけにはいきませんでした。

「雲さん、長い間、どうもお世話になりまして、お礼の申しあげようもありません。私は、下界へゆきます。そして、坊ちゃんや、お嬢さんたちのお仲間入りをいたします。私は、もう、さびしくて、さびしくてかないません……。」と、まりはいいました。

雲は、このことを聞くと、また、まりの心持ちに同情をしました。

「それほど、あなたが帰りたいたなら、つれて行ってあげましょう

。「と、雲くもはいいました。

ある夜よる、雲くもは、まりを乗のせて下界げかいへ降おりてきました。そして、

いつかまりの隠かくれていたやぶの中なかへ、そつと降おろしてくれました。

「まりさん、お達たつしや者しやにお暮くらしなさい。さようなら……。」と、

雲くもは、名残なごり惜おしげに別わかれを告つげました。

「ありがとうございます。」と、まりは、お礼れいをいいました。

やがて、夜よるが明あけ放はなれると、やぶの中なかへ朝あさ日ひがさし込こみました。

小鳥ことりは木きの頂いたで鳴なきました。そして、ぼけの花はなが、真ま紅かな唇ちびるでま

りを接せつ吻ぶんしてくれました。

「まりさん、どこへいままでいつていなさいました？ みんなが、

毎まい日にち、あなたを探さがしていましたよ。」と、ぼけは、なつかしげ

にまりをながめていいました。

まりは、この地上ちじょうのものを美しくうつく、うれしく思おもいました。なぜ、自分じぶんは、この下界げかいを捨てすて、空の上そら うえなどへ、すこしの間あいだなりとゆく気きになつたらう。もう、これからは、不平ふへいをいわずに、みんなといつしよに暮くらすことにしようと思おもいました。

子供こどもたちは、どうしてもフットボールのおもことを思おもいきれませんでした。そして、またやぶの中なかへ探さがしにきました。彼かれらは、思おもいがけなくまりを見みつけたのであります。

「あつた！ あつた！ まりが見みつかったよ。」

「おうい、フットボールが見みつかった！」

「みんな、早はやくおいでよ。」

その日から、広場で、前のようにフットボールがはじまりました。子供たちは、その当座は気をつけてまりを大事にしました。しかし、いつのまにか、また乱暴にまりを取り扱ったのであります。なんとされてもまりは、だまっています。

こうしているうちに、まりは、もう年をとってしまった。はね返る元気もなくなれば、不平をいったり、逃れようとする勇氣もなくなっていました。子供たちのするままになって、終

ゆうじつそと

日 外へほうり出されているようなこともありました。

空の雲は、まりが疲れて、広野にころがっているのを見ました。雲は、あわれなまりを、気の毒に思ったのであります。もし、二度と空へくるような気があるなら、つれてきてやろうと思つて、

雲は、だれも、人のいないときを見はからつて、空から降りてきました。

「もし、もし、まりさん。」と、雲は呼びかけました。しかし、耳も遠くなつて、目のかすんだまりは、せつかくの雲の呼び声にも気づきませんでした。雲は、哀しそうに去つてゆきました。

——一九二五・四作——

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 ㊦」講談社

1977（昭和52）年2月10日第1刷発行

1977（昭和52）年C第2刷発行

※表題は底本では、「あるまりの一生《いつしやう》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：富田倫生

2012年1月21日作成

2012年9月28日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

あるまりの一生

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>